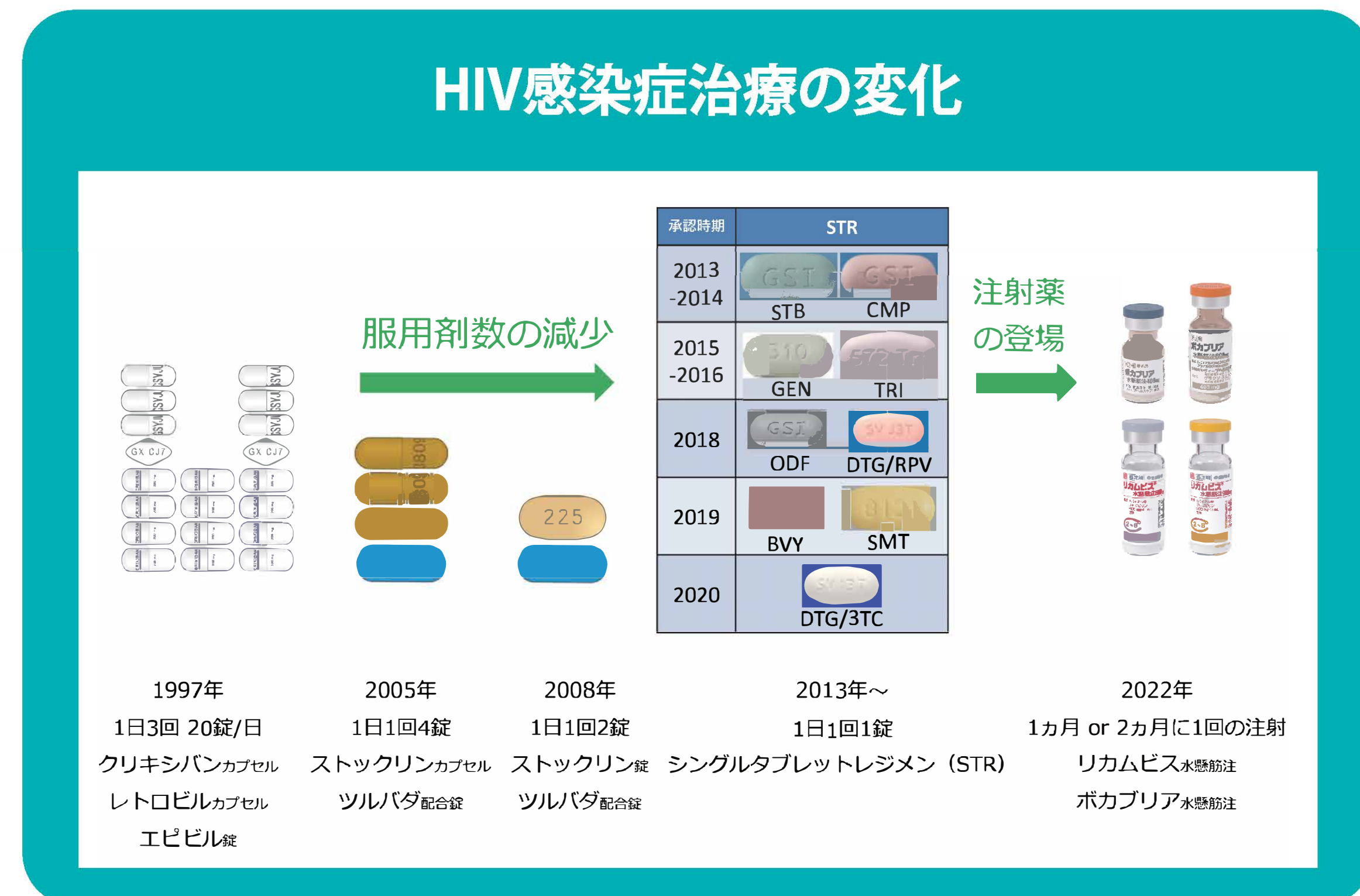


Q3 HIV/エイズは治りますか？どんな治療方法ですか？

HIV 感染症は、この 30 年間で治療薬が劇的に進歩し、コントロール可能な慢性疾患になりました。現在の HIV 感染症の主な治療方法は、1 日 1 錠の抗 HIV 薬の服用です。薬を毎日継続して服用すれば、ウイルスの増殖を抑えて免疫機能を維持し、健康な人と変わらない日常生活を送ることが可能です。検査によって早期発見することで、早期治療につなげることができます。

かつては薬の数や服用回数が多かったり、強い副作用があったりと、患者さんにさまざまな負担がありましたが、現在はそうした負担はだいぶ軽減されています。2022 年には、1 か月または 2 か月に 1 回の注射で完了する治療も可能になるなど、HIV 分野の医療の進歩が続いています。



Q4 どんなきっかけでHIV/エイズの専門医になったのですか？

潟永 元々、東京大学医科学研究所で、前 ACC センター長の岡先生のもとで仕事をしていたので、ACC 設立から 1 年後、学位を取得したタイミングで岡先生のいる ACC に移りました。それまでは微生物を研究しつつ、大学病院での研修中に血友病患者さんの救済医療や HIV/ エイズの治療に携わりました。当時、HIV/ エイズは医療者にも恐れられた未知の“死の病”でしたが、それに抵抗感なく向き合える自分が取り組むのがいいだろうという気持ちでしたね。

照屋 元々、沖縄の大学で呼吸器と感染症の専門医として免疫学の研究をしながら、病院で HIV の患者さんも診療していました。当時の教授に「1～2 年、国の医療機関で HIV について勉強してきなさい」と ACC に送り出されました。ちょうど抗 HIV 薬ができて治療が劇的に進歩した転換期に居合わせたので、目の前の患者さんを元気にしていける状況をしばらく見ていたいと思って教授に延長をお願いしているうちに 30 年が経ちました (笑)。

Q5 いま、ACC はどんなことを目指していますか？

潟永 これまで ACC が取り組んできたことを活かして、治療と予防の両輪でさらに質の高い HIV/ エイズ分野の医療を進めていくことが重要だと考えています。最近では HIV 患者さんの成人病などのコントロールや、梅毒など他の感染症の発症を防ぐケアの重要性も高まっています。患者さんがさまざまな合併症を治療しながら、より健康に過ごせるように診ていきます。全国の拠点病院との連携や、感染症専門の医療従事者に向けた e ラーニングの提供などを通じて、患者さんが安心して治療を続けられる環境も整えていきます。

照屋 医療の進歩によって HIV は治療すれば人にうつさない状態「U=U*」が維持できるようになりましたが、患者さんのこころのケアにはまだ課題があります。病気を隠したり、差別偏見に苦しんだりしなくてよいように、メンタルヘルスの向上にも注力します。また、SNS の普及を背景に性感染症の制御がより難しくなっていますから、検査による早期発見がますます重要になります。近年、感染者が増加している梅毒と HIV をセットで検査できるようにするなど、より多くの人が検査を受けやすくしたいと考えています。

*「UNDETECTABLE = UNTRANSMITTABLE」の略。ウイルス量が検出限界値未満なら感染はしない状態のこと。

皆さんへのメッセージ

HIV 感染のリスクがある人に、ぜひ検査を受けてほしいと伝えたいですね。日本では非常に良好な治療成果が出ていますから、検査を受けて感染が確認されれば、しっかり治療を受けることで日常生活を続けることができます。命を守るために検査を受けることがとても重要です。それによって HIV の新規感染者ゼロとなる未来も実現可能になってきます。

HIV 患者さんには、医学も治療薬もどんどん進歩しているので、自己肯定感をもって前向きに人生を送ってほしいと思います。感染を心配している人は、早期治療によって治すことができるので、勇気を出して検査を受けてほしいですね。そして多くの人に、HIV 患者さんの悩みや辛さについて知り、差別偏見をなくしていったほしいと願っています。



潟永博之

国立国際医療研究センター
エイズ治療・研究開発センター (ACC)
センター長

Dr. GATANAGA



照屋勝治

国立国際医療研究センター
エイズ治療・研究開発センター (ACC)
臨床研究開発部長

Dr. TERUYA

写真：新聞雅士 (photographer)